

P・カンスタブル；
A・バレンスエラ著

『敵対する国民——ピノチェト
支配下のチリ——』

Pamela Constable; Arturo Valenzuela, *A Nation of Enemies: Chile under Pinochet*, ニューヨーク, W. W. Norton & Company, 1991年, 367ページ

高橋正明

I

1973年9月、ピノチェト将軍に率いられたチリ軍はアジェンデ社会主義政権をクーデターで倒した。以後、1990年に民政移管が実現するまでの17年間、チリはピノチェト将軍による軍事独裁支配の下にあった。ラテンアメリカ諸国の中で例外的に安定した民主主義政治体制を維持してきたチリで、なにゆえにかくも苛酷な軍事独裁が生み出されるに至ったのか。ピノチェト将軍が、国際的孤立の中、17年の長きにわたって個人独裁を維持しえたのはなぜなのか。独裁の17年間に何が起き、チリ社会はどのような変化を遂げたのか。そして、銃剣に支えられた独裁政権が平和的な選挙で倒されるといった事態がいったいどうして可能になったのか。こうした問いかけを出発点に、1973年クーデターから90年のエイルウィン大統領の誕生に至るチリ民主主義の死と再生のドラマを、本書は実に見事な筆致で生き生きと描き出している。

著者のひとりアルトゥーロ・バレンスエラはチリ系アメリカ人の著名な政治学者で、現在はジョージタウン大学ラテンアメリカ研究所長である。彼はチリの政治に関して多数の優れた論文・著書を発表しており^(注1)、とりわけその著作『チリ民主主義の崩壊』(*The Breakdown of Democratic Regimes: Chile*, ホルティモア, Johns Hopkins University Press, 1978年)は数多い類書の中でもっともバランスのとれたアジェンデ政権論として高い評価を受けている。共著者のバ

メーラ・カンスタブルについて評者は多くを知らないが、ブックカバー裏の著者紹介によると、1983年以降『ボストン・グローブ』紙の中南米特派員をつとめ、その優れた報道で数々の賞を獲得しているとのことである。2人のコンビは今回が初めてではない。両人はすでに1986年、『フォリン・ポリシー』誌上に「次はチリか?」と題する論文を連名で発表しており、以後ほぼ毎年のようにチリ情勢について『フォリン・アフェアーズ』誌や『カレント・ヒストリー』誌などに寄稿してきた。このように、本書は、2人の優れた研究者とジャーナリストによる長年の共同作業の上につくられた成果である。

著者たちは、基本的に反軍政の立場に立ちながら、単なる軍政の告発に終わることなく、できる限り客観的にピノチェト軍政を分析しようと試みている。クーデターはチリ国民を勝者と敗者へと截然と分け、社会の分裂状況を固定化した。右派と左派、富者と貧者、軍人と民間人など、あらゆる社会集団が他者から隔絶された自分だけの小宇宙の中に閉じこもり、互いに憎しみ合い、恐れ合うこととなった。本書のタイトル『敵対する国民』もそこからきている。著者たちは、そうした分裂と対立を越えた和解への道を探る。そのためには、小宇宙の壁ひとつひとつに外界への窓を開け、対立し合う見方と立場を外気にあてて、明るみに出していくことが何よりもまず必要だろう。

そのために著者たちは可能な限り多くの異なった人々の声に耳を傾けようとした。本書の最大の特徴は、社会階層や政治的立場を異にする数百人にのぼる人々とのインタビューである。ピノチェトの元顧問をはじめとして、政府高官、政策担当者、政治家、現役・退役の将軍・将校、判事、弁護士、ジャーナリスト、聖職者、大企業経営者、中小企業家、労働者、テクノクラート、エコノミスト、拷問の犠牲者、行方不明者の家族など、軍政の受益者から犠牲者に至るまで、有名無名を問わず、インタビューの相手はきわめて広範囲に及ぶ。

II

この種の書物を執筆する際には常に、時間の流れに

沿った歴史叙述と論理的分析とをいかに統一連関させるかという難問に突き当たる。その点、本書は両者をきわめて巧みに組み合わせた構成となっている。各章ごとに、軍、ピノチェト、人権抑圧、経済政策、軍政下の社会経済の変化、富者と貧者、青年層、政治家たち、民政移管といったテーマが立てられて分析されると同時に、全体の章立てにあたっては各章が軍政17年間の歴史的な流れに沿うように配置されているのである。

本書は全部で12章から成っている。

第1章「戦争」は1973年9月11日のクーデター当日の様相から始まる。大統領官邸モネダ宮への爆撃とアジェンデの死。しかし民衆の抵抗はほとんどなく、多くのチリ人はクーデターをむしろ安堵の念で迎えた。なぜクーデターが起きたのか、著者たちはそのプロセスを振り返る。そして、アジェンデ政権末期、社会的対立が極限に達してもはや出口なしの状況にあったこと、多くの人々が軍の介入によって袋小路を抜け出し正常な市民生活に復帰できるだろうと期待していたことが明らかにされる。だが、そうした人々の思惑を超えて、事態は予期せぬ方向へと展開していった。権力を握った軍が一人歩きを始めたのである。

第2章「軍人たち」はその軍が検討の対象となる。チリの軍が長年にわたって社会から隔離され、独自の人的関係、メンタリティ、価値観を持つ閉鎖的な集団として形成されてきた様子が描かれる。そしてアジェンデ期における社会的緊張の増大の中で軍内の文民支配尊重の伝統がだいに掘り崩されていき、ついにクーデターへと至るプロセスが明らかにされる。

第3章「独裁者」では、当初の軍事評議会による共同統治がいかにしてピノチェト陸軍司令官による個人独裁へと変質していったのか、またピノチェトの「権威主義的民主主義」体制がいかに構想され具体化されていったのが検討される。さらにさまざまな角度から、ピノチェトのパーソナリティや行動様式、政治思想が描き出されている。

第4章「影の軍隊」と第5章「法」では、軍政下での人権侵害の実態が明らかにされる。第4章では、絶大な権限を握って殺人、誘拐、拷問、スパイ活動を繰り返した秘密警察の実態と弾圧の犠牲者たちの姿が、第5章では、軍事政権の違法行為に一切異議を唱えず、

法の番人の役目を放棄した裁判所の状況が描かれる。

第6章「恐怖の文化」では、もともとチリ社会が家柄、階級、政治信条を異にする小社会に分裂しているが民主主義のベールで隠されていたこと、アジェンデ政権末期、そのベールが引き裂かれて分裂が剥き出しになり、小社会間の相互不信と敵対が極限に達したこと、クーデターと軍政支配によってこの分裂が一層拡大したことが指摘される。

第7、8、9章の3章では軍政の経済政策によってチリ社会がいかに大きな変容を蒙ったかが議論される。第7章「テクノクラート」では、軍政の経済政策を担当したシカゴ学派のエコノミスタたちが主人公である。市場メカニズムに全幅の信頼を置く彼ら「シカゴ・ボーイズ」は、チリ経済が1930年代以来の保護主義と福祉国家化によって停滞に陥ったと考え、市場と競争にもとづく近代的で効率的な経済を創りだそうと徹底した自由開放経済政策を実施した。1981年の経済危機をきっかけに彼らは表舞台から退くが、その後には身軽になった国家が残され、進取の気に富む新興企業家が誕生していた。第8章「富者」では、チリ経済の変容の「光」の部分に焦点があてられる。消費経済の到来、ヤッピー的な経済人の出現、新しい経済メンタリティ・行動様式の浸透、経営合理化と技術革新、コンピューターの普及など、チリ経済の近代化が進んだ。これに対して第9章「貧者」では「影」の部分クロースアップされる。軍政の経済政策は下層の中産階級、労働者、下層民を窮乏化へと追い込んだ。失業が増大し、低賃金労働が一般化し、医療、住宅、社会福祉をめぐる状況は悪化した。こうした状況を背景に、1983年、中産階級、労働者、下層民による大規模な反軍政抗議運動（プロテスタ）が勃発し、軍政支配に亀裂が入った。

第10章「独裁の子どもたち」では軍政下で生まれ育った青年たちがテーマとなる。大学においては教育・研究の統制と商品化が進行し、学生の多くが非政治化する一方、一部の学生が反軍政運動の先頭に立った。またポブラシオン（貧民街）においては、貧困と失業によって社会から排除された青年たちがその鬱屈した不満のはけぐちを麻薬や暴力的行動に求めていく。

以上のようなチリ社会深部での変化を踏まえて、最

後の第11, 12章では、反軍政勢力の政治的な結集と民主化運動の展開が語られる。第11章「政治家たち」では右派、中道、左派の政治勢力が軍政下で変容を遂げつつ再結集していく模様が、第12章「国の再生」では軍政が設定した制度的枠組を利用して反軍政勢力が民主化を実現していく過程が描かれる。

III

本書の最大の魅力は、分析の眼の焦点距離を自在に変化させ、全体を見渡す広角的でマクロな視野と個別具体性の接写によるミクロな視点とを見事に結合させている点にある。軍政下の経済、社会、政治の変化を正面から扱いつつ、社会科学書特有の構造的、非人格的な叙述に終わるのではなく、常に等身大の個人の目の高さまで視点を下げ、生き生きとしたイメージを喚起する具体的描写によって対象を視覚的に描き出している。チリにおける民主政治の伝統を論じた部分で、「選挙には家族揃って晴着を着て出かけた」(20ページ)との一節を挿入することでチリ国民の市民意識の強さを印象づけているのはそのほんの一例である。またチリ社会における政党の位置に触れた箇所では、政党への帰属が友人関係、余暇の過ごし方、子供の通う学校にまで影響していたとの指摘がなされている。このように「民主主義」「政党」「上流階級」「労働者」等々といった抽象的概念の概念操作によるのではなく、つねに人々の社会的結びつきのあり方や心的態度のレベルに即して対象が捉え直されているのである。

そうした方法を可能にしたのが、前述したように数百人にのぼる人々とのインタビューである。著者たちは、膨大な数のインタビューの中から、現実を凝縮したフレーズを選び抜き引用することで、さまざまな社会層に属する人々の輪郭を鮮かに浮かび上がらせている。ある退役空軍将校は言う。「1973年以前、若い兵士の最大の望みは將軍になることだった。今では、いつか大統領になれるかもしれないと思う」(87ページ)。エイルウィンの勝利後に発せられたこの言葉は、軍政下で軍人のメンタリティがどのように変わったかを端

的に物語っている。

こうして、軍政下の現象や出来事は、全体的、構造的な視点から分析されると同時に、当事者の肉声を通じて、リアルさと臨場感を伴って再現されている。電気ショックの拷問を受けて発狂寸前になった少女、自分の排泄物を食べさせられた年配の市長、投獄中の息子との面会に毎週末に人目を忍んで刑務所に通う公務員、拷問されている息子を救出してくれとの家族の必死の訴えに耳を貸そうとしない判事、左翼の活動家に僧衣を着せて大使館に亡命させた聖職者、チリは民主主義の準備ができていないと語る銀行家の妻、一大企業帝国を築き上げサンティアゴの超高層ビルを建てた企業家、仕事がなく仕事道具どころか結婚指輪まで買入れた老大工……。

無数の個人のドラマを通じて、しかもそれらを単なるエピソードの集積ではなく大きな全体の歴史の流れの中に位置づけながら、ピノチェト軍政の全体像がまるで細密画のように丹念に描き出されていく。具体的、個別的な経験に即したジャーナリズムの手法と、全体性を忘れない学問的な手法とが見事に組み合わせられているとも言えるだろう。研究者とジャーナリストの共著のメリットが最大限に発揮されていると言える。本書はこれまで現われたもっとも包括的でもっとも優れたピノチェト政権論であると断言して間違いなからう。

(注1) バレンスエラのその他の主な業績としては、チリ軍に関する修士論文“The Chilean Political System and the Armed Forces, 1830-1925,” Department of Public Law and Government, Columbia University, 1967年、チリの地方政治を論じた *Political Brokers in Chile: Local Government in a Centralized Polity*, ダーラム(ノースカロライナ), Duke University Press, 1977年がある。またサムエル・バレンスエラ(Samuel Valenzuela)との共編で、チリ社会に関する論文集 *Chile: Politics and Society*, ニューブランズウィック(ニュージャージー), Transaction Books, 1976年、および1970年代のチリ軍政に関する論文集 *Military Rule in Chile: Dictatorship and Oppositions*, ボルティモア, Johns Hopkins University Press, 1986年を出している。

(東京外国語大学教授)

ポブラドーレスの声

——チリ都市下層民の証言をめぐる——

La organización fue como nacer de nuevo, サンティアゴ, Taller de Acción Cultural, 1986年

たか 橋 まさ あき
高 橋 正 明

はじめに

- I 本書の概要
- II ポブラドーレスの世界
むすび

はじめに

軍政期（1973～90年）のチリにおける歴史学、社会科学で目につくのは、女性、農民、先住民、都市下層民など、社会生活の周辺部に追いやられてきた人々の「証言」(testimonios) への関心の高まりである。民衆自身が語る言葉に耳を傾けようという姿勢が強まってきたと言えるだろう。

そのひとつの表われが、1987年11月、「自伝、証言、ドキュメント文学」と題されてサンティアゴで開かれたセミナーである。このセミナーには社会学、人類学、歴史学、神学、哲学、美学、文学など広範な分野の研究者やジャーナリストが参加し、さまざまな角度から「証言」の持つ意味について議論を交わした^(註1)。たとえば、「チリにおけるオーラル・ヒストリー」と題した報告のなかで、レオポルド・ベナビデスは、オーラル・ヒストリーが「民衆世界、すなわち書かれた証言を残さない社会層へ接近する方法である」ことを強調し、最近のチリの歴史学界においてオーラル・ヒストリーへの関心が高まってきたこと、とりわけ1980年代に入って女性、農民、先住民、ポブラドーレス(pobladores)、労働者といった人々がテーマとなっていることを指摘している^(註2)。実際、この間、種々の証言集が出版されてきただけでなく、歴史学に限らず幅広い分野で、証言を主要な資料に用いた研究が数多く発表されてきた。

こうした動向にフランスの社会史やイギリスの労働史の影響があることは言うまでもない。しかし同時に、

チリ独自の事情が強く作用していることも見過ごしてはならないだろう。それは、1973年の軍事クーデターと、17年半におよぶ軍政の経験である。ベナビデスが上の報告のなかで、「深い傷を残した1973年の経験以降、過去への視線は新たな広がりを持つにいたった」と述べているように、民衆自身が語る言葉を学問研究へと組み入れていこうとする態度は、クーデターと軍事独裁支配という苛酷な経験をくぐり抜けるなかで獲得されていったものだったのである。

この点は、民間研究所のひとつ「教育・コミュニケーション研究所」(ECO)が出版しているモノグラフィー・シリーズの特集号「民衆史——歴史的記憶と主体としての民衆」の巻頭言で、同号の編集責任者をつとめたホルヘ・アンドレス・ブラボが指摘しているところでもある。ブラボは、オーラル・ヒストリーが人類学者のみならず、社会学者、歴史学者、あるいは民衆教育に携わる人々にとっても馴染みの方法となってきたと述べた後、こうした現象が1973年クーデターと密接に結びついていると述べている。クーデターによって、それまでチリの社会学者が共有していた社会＝歴史像が叩きのめされた。ブラボは明言していないが、彼の念頭にあるのは、マルクス主義の影響を強く受けた左派系の社会学者であろう。クーデター以前の左派系知識人において顕著だったのは、社会経済構造分析への強い傾斜、とりわけ基底的な経済構造への還元主義であった。また変革主体としてプロレタリアートが絶対視され、それ以外の社会層に関する関心は比較的薄かった。社会の基本的矛盾は経済構造に求められ、プロレタリアートがその矛盾を体現しているとされ、このプロレタリアートを代表しているとされる左翼政党が国家権力を獲得することによって社会変革を実現していく。これが左派系知識人たちの共有する社会像であり歴史的展望であった。1970年に成立した人民連

合政府の社会変革構想を基本的に貫いていたのもこうした発想である。だがブラボが言うように、そうした発想はクーデターという「冷厳な事実によって根底から疑問視される」にいたる。そしてクーデターによって人民連合の変革構想が挫折した後、その経験を批判的に検討していくなかで、変革構想の背後にあった社会＝歴史像もまた問い直されていくことになったのである^(注3)。軍政下、新たな社会＝歴史像の模索のなかで、関心は、客観的構造から主観的意識・価値観へ、国家から社会へ、プロレタリアートからより広範な民衆諸階層へと移っていった。ブラボの言葉を借りれば、「従来は構造研究がもっとも重視されていたのが、この10年間、徐々に新たなアプローチによってとって代わられてきた。市民社会、民衆文化、民衆諸階層の日常性といった問題が主要な関心となってきているのである」^(注4)。

そうした民衆世界の具体的現実に迫る方法の模索のなかで関心が高まってきたのが民衆自身の語る言葉だったと言えるだろう。実際、軍政下では、さまざまな民衆諸階層の証言集が編まれ、証言に基づく研究が現われた。そのなかでとくに目立つのは、女性、農民、先住民、都市下層民である。女性については、女性研究所(CEM)が中心になって聞き書きを行っており、農村の女性、都市のポブラシオン(población。低所得者層居住地区)に暮らす女性、都市インフォーマル部門で働く女性、先住民の女性など、さまざまな階層の女性の聞き書きを刊行している^(注5)。また農民については、農業研究グループ(GIA)が農民の自伝を募集し、これを『農民の生活とことば』との表題のもとに5巻にまとめて刊行している^(注6)。

なかでも多いのが、都市のポブラシオンに住むポブラドーレス(ポブラシオン住民)の場合である^(注7)。彼ら自身の証言集の他に、証言を叙述のなかに大幅に取り入れた研究書や論文も少なくない。代表的な研究として、たとえばラスジンスキーらはサンティアゴ市北部地区のポブラシオン居住の女性とのインタビューを行なって、貧困と失業に直面して彼女たちが生存を維持するためにどのような手段に訴えているのかを明らかにし、シュコルニクらは市東部と市西部の2つのポブラシオンにおいて同様な調査を行なっている。またバルデスはサンティアゴ市東南部のポブラシオン

居住の女性たちとのインタビューをもとに、彼女たちの性意識、出産、性交渉、避妊、中絶などに関する研究をまとめている^(注8)。

もちろん、自伝、体験談などの個人的証言を社会科学研究的資料として使ううえでの問題についてはさまざまな議論がありうる。個人史の場合、語られた過去があくまでも現在の主観によって再構成された過去であることは言うまでもない。さらに証言に自己合理化・正当化の要素が多かれ少なかれ入り込むことは避けられない。またどれほど重要な問題であろうと証言者にとって自明のことである場合には触れられずに終わってしまうであろう。こうした方法上の問題があることはチリの研究者たちの間でも意識され、論議されている^(注9)。そのうえで、民衆世界へのアプローチの有効な方法として証言の意味が重視されているのである。

(注1) このセミナーでの報告や討論は、ホルヘ・ナルバエスの編集のもとに『記憶の創造：と題されて出版されている。Narváez, Jorge 編, *La invención de la memoria*, サンティアゴ, Pehuén, 1988年。

(注2) Benavides, Leopoldo, "La historia oral," 同上書所収, 135~136ページ。

(注3) クーデターを分水嶺とするチリ左翼知識人たちの思想的変遷に関して詳しくは次の拙稿を参照。「軍政下のチリ左翼——知識人による思想的、理論的革新の試み——」(『東京外国語大学論集』第37号 1987年)。また人民連合政府の政策構想を貫いていた基本的発想については以下の拙稿を参照。「社会主義への民主的道とチリ人民連合——ブスコビッチ経済政策を中心に——」(『月刊アジア・アフリカ研究』第24巻第4, 5号 1984年4, 5月)。

(注4) Bravo, Jorge Andrés 編, "Memoria histórica y sujeto popular," *Educación y Solidaridad*, 第16号, 1987年, 7ページ。

(注5) 筆者が目を通すことができたものだけで以下のようなものがある。陶器生産で有名なポマイレで陶器生産に従事する女性たちの証言集『ポマイレの女性陶器職人と女性陶器労働者』(De León, Kirai ほか, *Loceras y trabajadoras de la arcilla en Pomaire*, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1986年)と『ポマイレの女性たちの仕事と労働』(Valdés S, Ximena; Paulina Matta, *Oficinas y trabajos de las mujeres de Pomaire*,

サンティアゴ, Pehuén/Centro de Estudios de la Mujer, 1986年), 農村と都市で働くある一家の母親と3人の娘たちの証言集『農村と都市の間での女性の労働』(Mack, Macarena ほか, *Los trabajos de las mujeres entre el campo y la ciudad: 1920-1982*, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1986年), 都市の家事労働者として働く女性たちの証言集『個人の家で私はこうして働いている』(Gálvez, Thelma; Rosalba Todaro, *Yo trabajo así…… en casa particular*, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1985年), 軍政下で新しく生まれた生活維持のための民衆組織「作業所」(talleres)で活動している女性たちの証言集『彼女たちは欠かせない存在』(Angelo, Gloria, *Pero ellas son imprescindibles*, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1987年), 陶器生産で有名な南部の村キンチャマリの女性たちの生活史『キンチャマリの女性たちの生活史』(Montecino, Sonia, *Historias de vida de mujeres de Quinchamali*, Serie Las Mujeres Hablan 5, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1985年), 先住民マプチェの女性たちの生活史『マプチェの女性たちの生活史』(Montecino, Sonia, *Historias de vida de mujeres mapuche*, Serie Las Mujeres Hablan 3, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1985年), 先住民アイマラの女性たちの生活史『アイマラの女性たちの生活史』(Gavilán, Vivián, *Historias de vida de mujeres aimara*, Serie Las Mujeres Hablan 3, サンティアゴ, Centro de Estudios de la Mujer, 1985年)。

(注6) *Vida y palabra campesina*, Primer concurso de Autobiografías Campesinas, 全5巻, サンティアゴ, Grupo de Investigaciones Agrarias, 1988年。

(注7) 軍政期のポブラシオン研究の概要についてはすでに別稿で紹介した(拙稿「チリにおけるポブラドール研究の展開」〔アジア経済〕第32巻第4号 1991年4月)を参照)。ポブラドールスの証言集として筆者の目に触れた限りで以下のものがある。SURなど4つの研究機関が1987年に「ポブラドールスの歴史」と題したコンクールで募集したポブラドールスの体験記のなかから入選作品9点をまとめて刊行した『都市の建設者たち』(Avello, David Jesús 他, *Constructores de ciudad: nueve historias del Primer Concurso "Historia de las Poblaciones"*, サンティアゴ, Ediciones SUR, 1989年), 失業者13人の証言集『半死半生で歌いながら』(Benavente, David, *A medio morir cantando: 13 testimonios*

de cesantes, サンティアゴ, PREALC, 1985年), 戦闘的なポブラシオンとして知られるポブラシオン「ラ・ビクトリア」(La Victoria)の青年指導者の証言集『勝利(La Victoria)の記録——1人のポブラドールスの証言——』(Lemunir, Juan, *Crónicas de La Victoria: testimonio de un poblador*, サンティアゴ, Ediciones Documentas, Centro de Estudios y Promoción Social, 1990年), 武力による反軍政非合法活動を行っていたポブラシオンの青年たちの聞き書き『ペドロたちの怒り』(Politzer, Patricia, *La ira de Pedro y los otros*, サンティアゴ, Planeta, 1988年)。

(注8) Raczyński, Dagmar; Claudio Serrano, *Vivir la pobreza: testimonios de mujeres*, 第2版, サンティアゴ, CIEPLAN, 1986年/Schkolnik, Mariana, *Sobrevivir en la Población José M. Caro y en Lo Hermita*, Colección Temas Sociales 1, サンティアゴ, Programa de Economía del Trabajo, 1986年/Schkolnik, Mariana; Berta Teitelboim, *Pobreza y desempleo en poblaciones: la otra cara del modelo neoliberal*, Colección Temas Sociales 2, サンティアゴ, 1986年/Valdés, Teresa, *Venid, benditas de mi padre: las pobladoras, sus rutinas y sus sueños*, サンティアゴ, Facultad Latinoamericana de Ciencias Sociales (FLACSO), 1988年。その他, 目についたものとしては, Contreras, Victoria; Uwe Weihert, *Sobrevivir en la calle: el comercio ambulante en Santiago*, サンティアゴ, PREALC, 1988年がある。

(注9) 方法上の問題への関心の表われとしては, 前掲のECO発行モノグラフィー・シリーズ特集号におけるイタリアのポルテリ, チリのカナーレスらの論稿(Portelli, Alessandro, "Las peculiaridades de la historia oral," Bravo編, 前掲資料所収, 35~46ページ/Canales C., Manuel, "Notas metodológicas para el análisis de autobiografías," 同上資料所収, 61~69ページ), あるいは前掲セミナーでのカルロス・ピーニャの報告(Piña, Carlós, "Verdad y objetividad en el relato autobiográfico," Narváez編, 前掲書所収, 29~39ページ)を参照。

I 本書の概要

ここで取り上げる証言集, *La organización fue como nacer de nuevo* (サンティアゴ, Taller de Ac-

ción Cultural, 1986年)も以上のような流れのなかで生まれた書物である^(註1)。本書は、サンティアゴのポブラシオンで生活する5人の女性(ラウラ[Laura], イルダ[Hilda], マリー[Mary], グラシエラ[Graciela], イサベル[Isabel]—いずれも仮名)の自伝である。5人のうちラウラ, イルダ, マリーの3人はポブラシオン「ヌエボ・アマネセール」に、グラシエラとイサベルの2人はポブラシオン「ロ・エルミーダ」にそれぞれ住んでいる。ロ・エルミーダはサンティアゴ市の東部に位置し、現在7万5000人が居住する比較的大きなポブラシオンである。またヌエボ・アマネセールは市の東南部に位置し、502世帯が住んでいる。いずれも1970年に土地占拠運動を経て誕生したが、その際、左翼急進派の革命左翼運動(Movimiento de Izquierda Revolucionaria: MIR)が大きな役割を果たした。とくにヌエボ・アマネセールは、1970年代初頭、MIRの重要拠点だったカンパメント(Campamento。キャンプ)、ヌエバ・ラ・アバナ(Nueva La Habana)として有名だった所である^(註2)。このように政治色がきわめて強かった点で、この2つのポブラシオン(とりわけヌエボ・アマネセール)は一般的、平均的なポブラシオンと言うことはできない。

また彼女たち自身もまた、一般的、平均的なポブラドールレスではない。彼女たちはいずれも、ポブラシオンにおいて軍政下で生まれた草の根組織の活動家だった。もっとも組織と言っても数十人から成る小グループであり、彼女たちの生活は一般のポブラドールレスと大きく異なるところはなかったが、それでも彼女たちの意識や行動が一般のポブラドールレスと比べて政治化されたものであったことは間違いない。しかも、彼女たちは、両ポブラシオンで活動していた民間研究教育組織「文化行動ワークショップ」(Taller de Acción Cultural: TAC)と密接なつながりを持っていたが、このTACはMIR系の知識人が設立したものであった。本書の誕生にあってもこのTACが中心的な役割を果たしている。

以上のような問題点があるにもかかわらず、本書はポブラドールレスの生活、行動、意識を理解するうえできわめて示唆に富む資料となっている。他の証言集と比べてみたとき本書のメリットとして以下の点が挙げられるだろう。

まず第1に、1人1人の証言がかなり長く、幼少時から現在までの生い立ちがさまざまな挿話をまじえて生き生きと語られていることである。他の証言集では1人1人の証言がそれほど長くはないし、特定の時期やテーマに限られている場合も少なくない。それに対して本書では、5人がめいめい、自分のこれまでの生活をいわば丸ごと語っている。それゆえ、証言を子細に検討していくと興味深い問題が数多く浮かび上がってくる。その意味で、きわめて豊かな資料と言えるのである。

第2に、証言を行なっている女性が複数であることである。しかも、彼女たちの経験は比較検討するうえで適度の親近性と異質性を持っている。5人はそれぞれ異なる生い立ちを持ちつつ、やがて同じポブラシオンに住むにいたり、さらにポブラシオンの草の根組織とともに活動する仲間となった。彼女たちの行動や考え方に表われる共通面、相違面を比較検討することにより、さまざまな問題が明らかになってくる。

本書は3部から成る。第1部は、5人の女性の自伝が語られた本書の中心部分で、全ページ数の8割を占めている。そこでは5人の女性が1人ずつ、幼少時代から現在までの生い立ちを語っている。5人のうちマリーは自ら執筆したが、あとの4人は口述による。口述にあたっては、TAC所長ベロニカ・サラス(Verónica Salas)がインタビューとなってテープに録音し、それをタイプ原稿におこし、各人が手を入れたうえで最終的に出版された。編者による編集の手は最低限が入っている。インタビューの質問、発言はすべてカットされて、各人の発言が連続させられた。その結果、インタビューでは質問と回答の対話形式だったのが出版された書物では各人の独白形式となっている。しかし、編者による発言順序の入れ替え、表現の書き換えはないとのことである^(註3)。

第2部は約20ページから成る。この部分は、軍政下のポブラシオンで生まれたさまざまな組織について、5人が一堂に集まって語ったものの記録である。組織別に項目が立てられており、複数の人物の発言が発言者が明示されぬまま区切りなしに並列されている。

第3部は編者(ベロニカ・サラス)の手によるもので、組織論に関する10数ページの短文である。ここでは、組織が民衆にとっての学校であり、アイデンティ

ティを形成する場であり、民衆運動の担い手であるとの組織論が展開されている。本書を編むにあたって編者が抱いていた意図がここに示されていると言ってよからう。

しかし、興味深いのは、こうした編者の意図を乗り越える内容を5人の女性たちの証言が持っていることである。ポブラドーレス自身の語る声を通して、私たちは、彼らの世界をいわばその内側から知ることができる。

(注1) 筆者は別の機会に同書を資料に用いて、ポブラドーレスの生活、価値観、社会関係、組織、運動などについて検討したことがある。詳しくは拙稿「ポブラドーレスの世界」(1)「都市におけるエスニシティと文化——国際比較の視点から——」文部省特定研究報告 No.13 1989年)／「ポブラドーレスの世界」(2)「地域紛争(コンフリクト)と相互依存(1)——地域紛争の今日的意味と分析枠組み——」文部省特定研究報告 No.15 1990年)を参照のこと。

(注2) カンパメントとは、1960年代末から70年代初めにかけて、左翼・中道政党の指導する土地占拠運動によって成立した不法占拠地区のことを指す。

(注3) この点は編者のベロニカ・サラスが筆者に確言した。ベロニカはまた、インタビューを録音したテープのコピー、マリーの自筆ノートのコピーを筆者に提供してくれた。この機会を利用して感謝の気持ちを表わしたい。

II ポブラドーレスの世界

1. 多様性と相似性

前述したように、本書のメリットのひとつは、さまざまな生い立ちを持つ女性たちの経験が比較対照できることである。

彼女たちが生まれ育った家庭はいずれも貧しく、みな小さいときから働きに出なければならなかった。ただ貧しさの程度は人によって違う。グラシエラの場合には新しい靴を買って貰えず、母親が貰ってくる古靴をいつも履いていた。だが他の4人はそれほどではなく、たとえばイサベルの家では独立記念祭(9月18日)とクリスマスにはいつも新しい服をおろして着るのが習慣となっていた。また5人とも毎日の食事に事欠く

ほど貧しくはなかった。働こうと思えば女中として、あるいは町工場の女工として仕事があったからである。グラシエラもパン屋で働き始めると「給料はよく」、家に金を入れただけでなく自分用の洋服、靴などを買えるようになった。仕事があれば、わずかでも生活が改善されていく可能性があったことが分かる。

とはいえ、両親、彼女たち自身と夫、子供たちと3代を比べてみた場合、社会的な上昇は見られない。彼女たちについて見る限り、社会的上昇の鍵である教育は小学校どまりである。また彼女たちの結婚相手についても、いずれも工場労働者や雑業従事者であり、結婚を通じての社会的上昇も見られない。これは彼女たちが幼少の頃から働かなければならなかったからだが、親たちが教育熱心でなかったためでもある。もっとも一般に、ポブラドーレスの間で教育を通じての上昇志向が皆無だというわけではない。イサベルは、隣の主婦について、「あの人は私と同じような人で、私と生活水準も一緒だけれど、もっと上であるかのように装おうとしていて、自分の子供たちを話題にするときにはいつも、自分の息子は大学に行くんだと言っていた。あの奥さんは自分の生きている現実に気がついていないんだ」(225ページ。以下、本書からの引用は繁雑さを避けるために本文中にページ数を示すことにする)と語っている。このようにイサベル自身は上昇の可能性に否定的だが、彼女の言葉は、ポブラドーレスの間には上昇志向が見られることを示している。

ところで一口にポブラシオンといっても決して一律ではない。大きく区分すれば、(1)コンベンティージョ(conventillo)、パスアヘ(pasaje)、シテ(cité)などと呼ばれる都心部の老朽化した賃貸集合住宅、(2)鉄道線路際や川辺の空地进行不法占拠して生まれた自然発生的な掘立小屋群のカジャンパ(callmapa)、(3)政党の指導による組織的な占拠運動で成立したカンパメント、(4)政府・協同組合などが建設した団地(4階建てアパートの場合と平屋一戸建の場合がある)に分けられよう。

証言を読んで注意を引かれるのは、彼女たちがいずれも住む場所をたびたび変えている点である。移り住む場所を列挙してみるだけで都市下層民の居住状況の一覧ができるほどである。たとえばイサベルの場合、はじめにシテに住んでいたが、まもなく家族そろって協同組合によって建設されたポブラシオンへ移り、や

が同棲を始めるとあちこち間借りをくりかえした。また部屋代が払えなくなってカジャンパに住む経験もしている。そして最後に土地占拠に参加して自分の土地と家を手に入れる。このように、ポブラドーレスは最終的に自分の所有する土地と家を獲得するまでに、あちこちとポブラシオンを移動している。それゆえポブラドーレスを固定的な存在と見なすことは誤りであることが分かる。

彼女たちの証言からはまた、ポブラシオンによって住民の性格や住民相互の関係がいろいろであることも分かる。マリーが住んでいたシテのひとつでは野外定期市場（フェリア）で働く人たちが主として住んでいたが、みな野卑だったと言う。レスビアンや売春婦もいた。喧嘩は毎日のことで、刃傷沙汰が始終あった。住民の間に何らの共同意識もなかったことが分かる。またイサベルが住んだカジャンパでは「飲んだくればかりが住んでいた。ひどい生活をしている人々ばかりだった」（216ページ）。これに対して、イサベルが幼少時代を過ごしたポブラシオンはまったく対照的である。このポブラシオンは協同組合を通じて建設されたもので、住民はすべて以前同じ地区にあったシテから移ってきた人たちだった。「ポブラシオンでは自由に家を往き来し」、「人々の関係は家族のようなもので」、「みんな助け合いの気持がとても強かった」（208, 209, 236ページ）。ポブラシオンには住民が建てた集会場があり、会議やダンスパーティが開かれた。コートでは週末にバスケットの試合もあったし、文化集會が行なわれた。このポブラシオンは一種の共同体だったと言ってもよいだろう。もちろん、すべてのポブラシオンがこのようであったわけではもちろんない。ポブラシオンが大きい場合には、住民相互に面識があるとは限らない。ポブラシオン「ロ・バジェドール」に住む女性はラウラに向かってこう言っている。「気をつけなさい。サンティアゴの男たちはあまり性がよくないわよ。……この地区に住んでいる男たちは少しは信用できるけど、他の地区の男はだめよ」（41ページ）。同じポブラシオンのなかでも近隣地区の住民以外に対しては身内意識はなく、警戒の対象ですらあることが分かる。

このように以上の例からだけでも、彼女たちの発言に表われた共通面と相違面を比較検討することでポブ

ラシオンの具体的様相が立体的に浮かび上がってくるものが了解されるであろう。

2. 内側からの理解

本書の第2のメリットは、ポブラドーレスの世界をその内側から、彼ら自身の眼の高さから見るができることである。

彼女たちの証言において最大の比重を占めているのは夫との関係である。彼女たちの生活にとって夫との関係がいかに大きな位置を占めているかがここに表われている。

しかし多くの場合、彼女たちの夫婦関係は不安定である。離婚・別居・愛人問題などがあり、安定した夫婦関係は少なく、5人の女性のうち実に4人までが離婚か別居を経験している。またイルダのように、愛情からではなく打算から生まれた結婚の事例もある。

彼女たちの証言からは、家庭内で夫と妻の活動領域がはっきりと分離していることが分かる。まず、労働がそうである。夫は現金収入を得るために外に働きに出、妻は家に残って育児と家事を担当する。余暇も同じである。夫は家の外で仕事仲間、遊び仲間とつき合う。平日には仕事が終わっても同僚たちと飲んだりしてすぐには家に帰らないし、日曜日には妻を家に残して、遊び仲間と出かけてしまう。ラウラは、結婚して2週目の週末、夫に「自分はサッカーをしに出かけるから、お前は家に残って家事をしろと言われ、大喧嘩になった。夫は「自分の仲間の間ではそうだから、自分もそうしようとした」（45, 46ページ）だけである。また多くの男たちは妻が外へ働きに出ることを嫌う。ひとつには、家族を養っていく自分の能力がおとしまられたかのように感じるからだろう。また、妻が外で他の男とつきあうことが嫌だからでもある。イルダの夫がそうで、「嫉妬深かった。私がちょっとでも外出するのを嫌った」（69ページ）。このように、夫にとって妻は家にいるべきものだったが、それはまた妻の側の意識でもあった。イサベルはかつての自分を振り返って言う。「自分は〔外に出て〕働く必要はない、自分は家にいて、座って待っていれば〔いいと思っていた〕」（231ページ）。

こうした夫婦間の分業を支えているのがマナスモ（男性優位主義）である。夫は外で愛人を平気でつくるが、妻が他の男と接触するのはいやがる。妻は夫の

独占的な私有物であるとの意識があるからである。夫は家のなかで妻に対して専制的である。「あの人に仕えるのが、命じられたときにはシャツやズボンや何でも用意してあげるのがわたしには当たり前だった」（イサベル、223ページ）。マチスモはまた逆に夫婦間の分業に支えられてもいる。その意味で、失業は家庭内における支配基盤の喪失を意味するがゆえに男にとって最大の苦痛だった。1973年クーデター以後、彼女たちの夫はいずれも失業に追い込まれたが、イサベルは失業した夫が恥ずかしさから何日間も部屋に閉じこもっていた様子を語っている。他方、家では専横な夫も、家の外では、良き友人であったり、社会意識が高い労働者であったりする。イサベルの夫は友達の間では「仲間思いで、心が広く、友達のなかの友達だった」（222ページ）。またマリーの夫は、職場では「もっとも強硬な要求をするので組合指導部に加わった」（154ページ）。このように夫の行動様式が社会的な場と私的生活の場とはっきりと分離していることも具体的に分かる。この点は、チリの民衆運動の質を見るうえでも重要な論点となるところだろう。

ポブラドーレスの側から見ることで、現実が異なった容貌を見せることがある。とりわけ興味深いのが土地占拠運動の場合である。

都市下層民による土地占拠運動は一見するときわめて政治性が強い行動に見える。とくにチリの場合には左翼政党が主導権をとったからなおさらそうした印象が強い。しかもジウスティなどかつての研究から受ける土地占拠運動のイメージは、「家なし委員会」（Comité de Los Sin Casa）に組織された都市下層民が十分な準備のもとに整然と組織的に実行するというものであった^(註1)。

5人の女性のうち、マリーを除く4人はいずれも土地占拠運動に参加して地所を獲得している。その4人のなかで、土地占拠運動の意味を一番はっきり認識しているのはラウラである。ラウラは、「占拠は労働者が少しはましな住む場所を手に入れるためのただひとつの方法だと思っていた」（48ページ）。だが、そのラウラも家なし委員会に所属していたわけではなく、占拠運動の指導者と個人的に知り合いだった関係から誘われて参加している。他方、イルダの場合には親戚からの情報で、グラシエラの場合には姑に誘われて占拠

に参加した。しかも2人は占拠行動に直接参加はせず、後から合流して地所の割り当てを受けた。このように占拠のための組織化がきわめてルーズだったことが分かる。イルダとグラシエラの場合、占拠に加わるにあたってははっきりした政治意識、社会意識があったわけでもない。「地所が私のものになり、もうこれ以上間借りしたりしないですむようになるから」（グラシエラ、183ページ）というのが参加の動機だった。

5人のなかで、家なし委員会のメンバーとして占拠に参加したのはイサベルだけである。ある日、イサベルが住んでいたカジャンパに見知らぬ男女がやってきて、住民調査をし、集会に来るように誘った。イサベルは言われるままに集会に何度か出席し、メンバー登録をした。ある日、占拠実行の日時を知らされ、指定された場所に集合し、合図とともに一齐に空地へ駆け込んでテントを立てた。だがイサベルの証言からは、占拠行動に出るにあたって意識のうえで飛躍らしきものがまったく感じられない。多少の怖さはあったものの、占拠とは彼女にとって家を建てる地所を手取り早く手に入れることができる手段だったのである。

このように占拠運動の参加者の多くは、特別の社会的意識もなしに土地だけを目標に参加したと推測される。また占拠運動を担ったとされる家なし委員会も、ポブラドーレスによって下から組織されたものではなく、政党がポブラシオンの家々をまわって住民を登録して生まれたことも分かる。一見すると政治性が高い運動であるかのように見える土地占拠運動も、そこに参加した一般の人々の側から見ると、かなり違ったイメージが浮かんでくるのである。

同様なことは、土地占拠運動によって成立したカンパメントについても言える。

ラウラ、イルダ、マリーの3人が住むことになったカンパメント「ヌエバ・ラ・アバーナ」は、アジェンデ期、カストロ主義の流れを汲む革命左翼運動の拠点として組織化、政治化が高度に進んだカンパメントとして有名だった。ヌエバ・ラ・アバーナに関する過去の研究もほとんどがそのように描き出している^(註2)。しかし彼女たちの証言を読むとかなり違った印象を受ける。

たしかにカンパメントでは組織化が進んでいた。ブロックごとに住民の総会があり、ブロック代表者の会

議があり、さらにカンパメント全体の総会があった。保健衛生、監視、文化などさまざまな専門部会が置かれ、住民がその活動に参加していた。だが彼女たちの証言からは、カンパメントの運営が、革命左翼運動が実権を握る指導部によって上から行なわれていたとの印象を強く受ける。最高決定機関とされていた総会も、実際には上からの連絡・指示を住民が受ける場だったという印象が強い。たしかに住民による自発労働が行なわれたし、都心部でのデモに住民が参加した。しかし、これらは住民の自発的な動きであるというよりも、指導部を握っていた革命左翼運動がその政治路線を上から推進した結果であった。動員されても多くの人がその意味を十分理解せずに参加したようである。政治意識が高いラウラの場合にも、「あまりよく分かっていなかった。指導者が説明してくれたときだけ、いくらか分かった」(52ページ)と述懐している。

革命左翼運動は将来の社会構想をカンパメントで先取り的に実現しようとし、集団主義的な原理を導入しようとした。保健衛生班が各家庭をまわり、「各人の行動がどうなのか、どんな生活をしているのか、夫ないし妻、子供の扱いはどうか」(80ページ)を調査して、生活を律しようとしたり、掃除が行き届いているかどうか立ち入り検査した。これに対して「拒否する人間がいた」(76, 80ページ)とイルダは回想しており、カンパメント住民の志向と革命左翼運動の構想にずれがあったことが分かる。住民にとっての中心関心は、居住のための地所を手に入れることにあった。そのためには、警察との衝突などの危険も冒して行動した。しかし一度その要求を実現するや、その行動のエネルギーは低下する。ラウラも次のように述べている。「自分たちはあまり参加しなくなった。というのは、すでに地所を手に入れたからだ。……自分は〔デモなどに〕出かけることは少なくなり、総会に行くだけか、動員がかかって誰も家に残らないようにと言われたときだけ出かけた」(63ページ)。5人のなかでもひとときわ政治意識が強かったラウラですらこうだった。他の多くのポブラドーレスも多かれ少なかれ同様な反応を見せただろうことは想像に難くない。

政治の世界とポブラドーレスの日常生活の関わりについてはもうひとつ興味深い事実がある。5人の女性のうちマリーとグラシエラとイサベルの3人はアジェ

ンデ政権について一言も言及していない。とくにグラシエラとイサベルの2人は1973年クーデターについてもまったく触れていない。この時期の彼女たちの話ばもっぱら夫との関係に集中している。夫と子供、これが彼女たちの生活の中心だった。ポブラシオンには彼女たちのような人々が少なからずいたはずである。このように、ポブラドーレスの眼の高さから見たとき、チリ現代史の描き方も当然変わってくることになるだろう。

3. 証言の相対化

本書の興味深いことは、彼女たちの証言が自らの証言自体を相対化するような内容を持っている点である。

軍政下チリのポブラシオンでは貧困が深刻化し、生存維持のためのさまざまな組織が生まれた。彼女たちのポブラシオンでも、児童食堂、作業所、失業者職業紹介所(ボルサ)、共同なべ、共同購入、保健グループなどが組織され、彼女たちも積極的に関わった。

ところでこれら軍政下で多数生まれた生存維持組織の評価に関しては、研究者の間で大きく2つの見解に分かれている。第1の立場は、これらの組織がポブラドーレスが下から生み出した自律的な組織であり、その活動は連帯・参加・民主主義・自主管理の原理を実現していると高く評価する。これに対して第2の立場は、これらの組織が教会や支援団体に依存していて自律的とは言えず、しかも経済危機に対する一時的で防衛的な対応でしかないと考える。

彼女たちの証言はこうした評価の当否についても手がかりを与えてくれる。もともと彼女たち5人がこれらの組織に参加した直接の動機は、少しでも家計の足しになるような収入の道を求めてのことである。当初、彼女たちの頭にあったのは、「家の子供たちに食べるものを与えるために金を稼ぐことだけだった」(242ページ)。組織のメンバーの間関係も、「はじめのうちはお互いに知り合いだというだけだった」(イサベル, 229ページ)という状態だった。だが、やがてこれらの組織は単なる生計維持の手段ではなくなっていく。組織の活動は多面的なものとなり、メンバーの間には仲間意識が生まれていった。それは一種の小共同体だったと言える。イサベルは参加していた洗濯所について次のように言っている。「洗濯所は単に洗濯所だけというのではなく、アルピジェーラ(あまり布を使っ

運営は教会が直接行なっていたし、ホルサ・作業所の場合にも、組織の設立、製品の販売などで教会が大きな役割を果たしていた。とくにアルビジェーラなどの作品の販路についてはピカリアにほぼ全面的に依存していたようである。ヌエボ・アマネセールでは多くの作業所が設立されたが、いずれも採算が成り立たずに消滅したなかで、アルビジェーラ作業所だけが活動を続けてきたのは、教会が作品を買い上げてきたからだった。そのため多くの組織が運営面でも教会に依存していた。イサベルとグラシエラの眼には、同じ地区のアルビジェーラ作業所がそう映った。「何かちよつとも問題があると、あの人たちはそれを解決してもらうためにピカリアに出かけていった。そういうわけで何でもピカリアに依存していたんだ」(248～249ページ)。

外部組織として政党も無視できない。ロ・エルミーダのホルサもヌエボ・アマネセールのホルサもきわめて政治色が強かった。党员活動家が多かったためと推測される。軍政下、公然活動の場を奪われた左翼政党の党员たちはホルサなどに活動の場を求めたのであろう。ホルサの集まりでは、行方不明者の問題、失業問題など政治的、社会的問題について指導者が説明し、その後で全員による議論が行なわれた。またデモなどへの参加も半ば強制された。デモへの参加を条件にアルビジェーラの割り当てを行なうこともあったようである。それゆえ、軍政下のポブラシオン組織が、1973年以前とは異なり政党から自律化したと考えるのは誤りであることが分かる。

教会、政党と並んで重要なのが民間研究所の存在である。軍政下では大学を追われた研究者によってさまざまな民間研究所が設立されたが、これらの研究所は単に研究活動だけではなく、ポブラドーレスの組織化や教育研修に重要な役割を果たしてきた。イサベルたちは自分たちの洗濯所はピカリアから自律的だと強調しているが、実際にはこうした民間研究所の支援があったと考えられる。「自分たちの場合にはある人物の支援があり、その人は、私たちが最初から私たちだけで決定し、私たちの問題を私たちだけで組織として決めていくようにさせた」(250ページ)というからである。

こうして見ると、軍政下で生まれた生存維持組織が

自律的で、連帯・参加・民主主義・自主管理の原理を現実化していたと評価するだけでは一面的である。仲間意識で結ばれメンバーの総意に基づいて運営されていた組織が存在する一方で、内部争いやボス支配下にある組織も少なからず見られた。外部組織への依存も強かった。はからずも、こうした否定的側面についても彼女たちの証言は教えてくれる。

ただ不明なままに残る問題もいろいろある。いったい、生存維持組織のこうした性格の違いはどのような事情によるものなのか。内部争いやボス支配を生み出す背景となっているポブラドーレス間の日常的な社会関係は何なのか。仲間意識に結ばれた組織が生まれる条件となったのは何か。これらの点を明らかにするためには、さらに深く対象に入り込んでいかなければならないだろう。だがそれはどのようにすれば可能なだろう。

(注1) Giusti, Jorge, *Organización y participación popular en Chile: el mito del "hombre marginal"*, サンティアゴ/ブエノス・アイレス, FLACSO, 1973年。

(注2) Pastrana, Ernesto; Mónica Threlfall, *Pan, techo y poder: el movimiento de pobladores en Chile (1970-1973)*, ブエノス・アイレス, Ediciones Siap-Planteos, 1974年。都市社会運動の研究者として著名なカステルも、革命左翼運動に共感を寄せヌエボ・ラ・アバーナを高く評価して数々の調査研究を行なっているが、彼はその後見解を変えている(Castells, Manuel, "Squatter and Politics in Latin America: A Comparative Analysis of Urban Social Movements in Chile, Peru and Mexico," H.I. Safa 編, *Towards a Political Economy of Urbanization in Third World Countries*, デリー, Oxford University Press, 1982年, 266ページ)。

む す び

ポブラシオンに住む5人の女性による個人史を読むことで、ポブラドーレスの現実のさまざまな側面が明らかになった。ポブラシオンといっても決して均質な存在ではないこと、そこでの社会関係も多様であること、ポブラドーレスは固定的な存在ではないこと、ポブラドーレスの間ではマチスモが強く、男女の生活領域、活動領域がはっきり区分されていること、土地占

抛運動では政党と一般のポブラドーレスの間に意識のズレがあったこと、政治とはまったく無関係に生活していたポブラドーレスが多数存在したこと、軍政下で生まれた生存維持組織は性格がさまざまで単純な評価は下せないことなど、ポブラドーレスの世界のありようが具体的な容貌をもって見えてきたと言えるだろう。

しかし問題も残る。前節末尾で述べたように、さらに深く対象に入り込んでいくためには果たして今後どうしたらいいのか。筆者はこれまで短期間ながら数度にわたってポブラシオンでの現地調査を行ってきたが、そのなかでポブラシオンで生活する人々の間に独自の「われわれ」意識があることを感じてきた。しかしこうした意識を支えているものが何なのか、まだ答を出すまでにいたっていない。ただそれを掘み出すためには、もはや証言、すなわちポブラドーレス自身の

言葉に頼るだけでは不可能なのではないかという気がしている。彼らの語る言葉は彼ら自身が意識していることに限られており、彼らの意識の外に置かれたことはたとえどれほど重要であっても語られぬままに終わっているだろうからである。ポブラドーレスの語る言葉には表われてこない彼らの声がどうすれば聞こえてくるのか。いま筆者はそのところで立ち止まって考えあぐねている。

(東京外国語大学助教授)

〔付記〕 本稿は1989年度研究会「ラテンアメリカにおける経済構造の変化と社会階級」の成果の一部である。